

## 東北学院大学教育研究所2016年度活動

### 1. 教育研究所報告集第十六集の作成ならびに配布・発送

2016年3月 学内配布240部 学外発送233部

### 2. 平成28年度教育研究所総会

日時 2016年7月30日(土) 15:20-16:40

場所 東北学院大学教育研究所

#### 1. 報告事項

- (1) 2015年度予算ならびに決算
- (2) 2016年度学会出張参加者報告

#### 2. 審議事項

- (1) 2016年度の活動計画について
- (2) 研究所報告集第十七集(2017年3月刊行予定)の編集方針
- (3) その他

### 3. 教育研究所主催勉強会(第1回)

日時 2016年10月6日(木) 16:00-17:00

場所 東北学院大学教育研究所

講師 地域協働教育推進機構 松崎光弘先生

テーマ 理数系教育におけるアクティブラーニング:科学的思考の基礎」を題材に

内容 TGベーシック「科学的思考の基礎」を題材として、理数系科目の教育における効果的なアクティブラーニングについて講師のお話を伺いつつ、参加者全員でディスカッションを行った。

※年度内に第2回勉強会を開催する予定

## 教育研究所参加の2016年度学会・研究会

以下、教育研究所が機関会員になっているFD関係の学会ならびに所員が継続的に参加している研究フォーラム等の2016年の活動を報告します。この種の学会やフォーラムに参加を希望される教職員は、本学の「FD推進委員会」管轄の旅費をご活用して下さい。詳しくは、各学部のFD推進委員会委員にお問い合わせ下さい。

### 1. 大学教育学会第38回大会報告

会 場：立命館大学 大阪いばらきキャンパス

会 期：2016年6月11日(土)～12日(日)

主 催：一般社団法人 大学教育学会

共 催：立命館大学

参加者：菅原真枝

大会テーマ「伸びる大学の教育力——成果を出せる大学にはどのような教育力が必要なのか」

概要：いま大学に求められている教育力は、学生に教養や専門的知識を享受する個人レベルのスキルや方法ではなく、組織全体の教育力である。教員個々人の授業運営のスキルも重要だが、組織としての学科や学部のビジョンが明確でなければ、個々人の力を組織のなかで発揮し十分な教育成果を得ることはできない。基調講演およびシンポジウムにおいて、各大学における教育力向上の取り組み事例が紹介され、教育力を測る枠組みや指標をいかに構築するかについての議論がかわされた。

#### 第1日：6月11日(土)

14：10-15：30 基調講演

講演者 大野高裕氏(早稲田大学・理事)

講演題目 「Waseda Vision 150による教育力向上へのチャレンジ」

15：45-17：45 公開シンポジウム

「伸びる大学の教育力は何が違うか——データに基づいて検討する——」

パネリスト：吉武博通(筑波大学)「大学における教育力の強化とマネジメントの確立」

山本幸一(明治大学)「教育力を高める“特効薬”を探索する」

日向野幹也（早稲田大学）

「リーダーシップ教育普及元年——大学教育イントレプレナーシップ」

佐藤浩章（大阪大学）「エビデンスに基づく高等教育開発」

指定討論：濱名篤（関西国際大学）

司 会：鳥居朋子（立命館大学）

## 第2日：6月12日（土）

9：30－12：00 自由研究発表Ⅰ

13：00－15：00 自由研究発表Ⅱ

自由研究発表Ⅰ部会2（会場：AS357、司会：杉原真晃（聖心女子大学）、濱名篤（関西国際大学）

「教育方法・授業改善(1)」において、研究発表をおこなった。概要は以下のとおり。

① 9：30－9：50

清水亮（神戸学院大学）

「全入時代の大学教育の共通教育科目に求められる授業の工夫の試みと課題の考察」

概要：「標準英語Ⅰa・Ⅱa」や「現代の政治」、「現代の国際関係」といった授業にアクティブ・ラーニングを導入するうえで重ねた工夫を具体的に紹介し、アクティブ・ラーニング型授業の技法と戦略の確立の必要性を説いた。

9：50－10：10

谷美奈（帝塚山大学）

「自己形成史における物語とパーソナル・ライティング——「パーソナル・ライティング」を経験した大学卒業生への聞き取り調査から——」

概要：「パーソナル・ライティング」の受講者を対象にインタビュー調査を実施し、パーソナル・ライティングの経験が自己アイデンティティの構築と再編へ導く可能性を指摘した。

10：10－10：30

杉原真晃（聖心女子大学）

「サービスラーニング終了後の学生による継続的な地域とのかかわりの要因」

概要：初年次教育の一環として、中山間地域への宿泊をともなう現地体験型学習を実施したところ、サービスラーニング終了後においても学生が自主的に地域とのかかわりを継続させた事例について報告した。

10：40－11：00

箭内任（尚綱学院大学）、今井誠二（尚綱学院大学）、上野静（尚綱学院大学）、内田龍史（尚綱学院大学）、菅原真枝（東北学院大学）、田島裕之（尚綱学院大学）、新田貴之（尚綱学院大学）、濱崎雅孝（神戸松蔭女子学院大学、非会員）、濱野道雄（西南学院大学）

「東日本大震災ボランティア参加大学生からみる大学教育」

概要：東日本大震災ボランティアに参加した全国の大学生653名に対して実施した質問紙調査の分析結果を公表した。被災地の実情を知る授業やボランティア体験を振り返りそれを意味づける授業が不足しているという結論が得られた。

11：00－11：20

櫻井典子（新潟大学）、松井克浩（新潟大学、非会員）松井賢二（新潟大学、非会員）、高橋秀樹（新潟大学、非会員）

「学生主体PBLにおける学生の成長と課題～シンポジウムの企画・運営を通じて～」

概要：「リーダーシップ実践演習」において学生が地域住民とシンポジウムの企画・運営をおこなった。事前事後のリーダーによる自己評価の比較分析をおこない、プログラム改善のための課題を抽出した。

11：20－11：40

丸山智子（愛媛大学）、井上雅裕（芝浦工業大学、非会員）

「学生・大学職員の連携クラスによるリーダーシップ教育の設計と評価——学生・職員・教員の協働を目指して——」

概要：学生と大学職員が連携しリーダーシップ養成プログラムに参加することにより、スキルの向上のみならず、問題解決能力や行動力の向上が確認できた。

11：40－12：00 総合討論

概要：各報告を振り返りながら、部会全体で質疑応答がかわされた。

## 2. 第66回（2016）東北・北海道地区大学等高等・共通教育研究会

会 場：北海道教育大学札幌校キャンパス

会 期：2016年8月25日（木）～26日（金）

主 催：東北・北海道地区大学等高等・共通教育研究会

共 催：北海道教育大学

参加者：楊世英

## 全体テーマ：高等教育の質保証と体系的な教育をめざして

去年山形大学で開催された第65回研究会では「魅了的な学士課程教育の構築に向けて」というテーマの下に次の3つの提言があった。

- ①魅了的な今日と行く方法としてのアクティブラーニングとそれを支えるFDの必要性
- ②教育の質をIRなどで検証していく必要性とそのため知見の集積
- ③入学前から入学後までを見通す初年次教育とキャリア育成を考察するという継続性と発展性

つまり、課程意識を深め、高等教育の質保証と体系化を提言することである。具体的には、次の3つのテーマを設定している。①高等教育における人材育成、②革新的な教育の取り組みとその成果、③学士課程教育の新たな評価

8月25日午前では基調講演：教学マネジメントの確立（北海道教育大学学長 蛇穴治夫）  
「成果の可視化と評価」に関しては、学校現場、教育行政関係者、保護者、学生などのステークホルダーの意見・要請を取り入れた教育課程の点検・評価制度をスタートさせたが、それと関わりが深いIR機能充実に向けた体制づくりは今後の課題である。

### 8月25日午後 分科会

#### 第1分科会「高等教育における人材育成—大学の国際化と人材養成プログラム」

現在、各高等教育機関で開発され実施されている、様々なグローバル人材育成プログラムの実態（事例報告）

#### 第2分科会「革新的な教育の取組とその成果—アクティブラーニングなどの取組を通して—」

アクティブラーニングに関して、事例の交換と意見交流である。①習得・活用・探究という学習のプロセスの中で、問題発見・解決を念頭に置いた深い学びの過程の実現、②他者との協働や外界との相互作用を通じて、自らの考えを広げ深める。対話的な学びの過程の実現、③子供たちが見通しをもって粘り強く取り組み、自らの学習活動を振り返って次につなげる。

#### 第3分科会「学士課程教育の新たな評価—ステークホルダーなどの多様な視点から—」

大学教育の質保証については、これまでにルーブリックの活用などの「見える化」の取り組みが行われ、その概要が紹介されている。

### 8月26日午前 事例報告

#### 教学IRの組織的導入とカリキュラム改革（北海道大学高等教育推進機構 細川敏幸）

IR（Institutional Research）活動の紹介と北海道大学の学生自習時間の調査例による英語

力の育成・維持・リーダーシップの養成、コミュニケーション力の育成と関連していると報告されている。

### 3. 大学教育学会2016年度課題研究集会

会 場：千葉大学西千葉キャンパスけやき会館

(千葉県千葉市稲毛区弥生町1-33)

会 期：2016年12月3日(土)～4日(日)

主 催：一般社団法人 大学教育学会

共 催：千葉大学

参加者：松浦 寛, 渡部友子

#### 統一テーマ「学生はいかに学んでいるのか」

趣旨：現在、日本の大学は大学教育の質的転換が求められている。その中で、学生の学びを支援する観点から大学教育をとらえなおすとき、大学はどのようにあるべきか。多様な専門領域と教養教育の大学教育において、学生の学び方や考え方を支援するとき、どのような共通の視点に基づいた議論ができるか。今回の課題研究集会では、こうした広範な問題意識を踏まえつつ、「学生はいかに学んでいるのか」を統一テーマとしている。

基調講演では、少人数教育・対話型授業を教育の特徴におき、アカデミックアドバイジングを組織的に導入している国際基督教大学の教学改革から学生たちがいかに学んでいるのか、どのように成長しているのかを、学務副学長の森本あんり先生のご講演があった。大会校企画シンポジウムとパネルディスカッションでは、認知科学、教授方法・学習方法、学修支援という観点から、大学での学び方・教え方の転換がどのように可能なのかについて議論された。背景となる理論や参考となる実践例を学ぶことを通じて、知識伝達をこえた大学教育の在り方、学生の学修支援の在り方について共通の理解を深めることを目的としている。

#### 12月3日(土)

##### 1) ポスター・セッション [3階 レセプションホール] に参加

12:00～12:50 ポスター・セッション コアタイムI

14:40～15:20 ポスター・セッション コアタイムII

## 1、教員に必要なコミュニケーション能力に関する考察～学生による内省の分析から～

1年生と4年生でのコミュニケーションの違いを研究されている。教育実習経験を積むことで意識が変わってある項目に関して成長が見られるという結果が得られている。アンケートにおいても現実を知ることによって自己評価に関して謙虚な数値になったようである。初年度の学生が4年時の学生ではなくデータの整合をすることが難しいことがわかった。また、年次により良い悪いが周期的にくることなどもありデータの処理には苦勞されていた。

## 2、大学における教育情報の活用および公開の現状と課題—全国大学調査に基づく検討から—

科研費研究のテーマ。アンケートを各大学の学長に送り、関係部門に回してもらい、アンケート結果を回収してまとめている。大学の目的（研究系、教育系など）に応じて、大学からの情報を発信してそれをフィードバックしているかを数値化している。国立は文科省からの評価項目があり補助金の減額につながるため、そこそこ真面目に行っているが県立大はその縛りが無いので比較的数値が悪い。ちなみに、アンケートの回収率は2割とのこと。

## 3、理工系教育におけるアクティブラーニング導入に向けたFD研修の成果と課題

ビジネスマナーなどを生業にしている民間企業が大学のFDに参画したという内容。芝浦工大でもアクティブラーニングはこれからという状況である。彼らは、授業の中身を小テスト、講義、議論、小テストと細かくわけて行うのもFDという解釈をしている。

## 4、奨学金データの Institutional Research—受給奨学金・出身地域と教育成果の関係性に関する検討—

関東地方からの早稲田に約7割が入学する。その中で、4割近くが奨学金を受給しているとのこと。ただし、実際に奨学金を生活に当てていない学生もいるようである。また、奨学金の受給者のうち、中国地方及び九州地方から来る学生が顕著に成績も悪い傾向にあり、奨学金が年を追うごとに打ち切られるため受給率が低くなるという結果であった。自身の経験から、地方から東京を目指すのは勉強より学生生活を満喫することであるのは今も昔も変わらないと感じた。

## 5、課題協学科目：九州大学基幹教育における全1年生必修の文理混合PBL型授業

TGベーシックに近い考え方で初年時教育を行っている。本学と異なる部分は学部枠を取り払い50名人クラスで混在させて角分野の専門内容を浅く学習している。九大はキャンパス移転中のため学生も教員も箱崎Cからの移動があり苦勞があるとのこと。学生及び教員の評

判は上々とのこと（もちろん否定的な学生も少数はいる）。また指導方法を事前に説明しているが無視する教員がわずかに居るところが残念。担当教員は部局の仕事の平等性から50%の教員が毎回入れ替わる。地方私立の学力レベルでは理解できないのではと聞いたところ、内容が広く薄いので大学の偏差値で差はないだろうとのこと。色々な学生とのコミュニケーションができるため、これを利用して自己を変えたい学生がいるとのことであった。

## 6、初年次教育を学生はどのように捉えるか：プログラム受講直後のインタビュー結果の検討から

「鉄は熱いうちに打て」から初年度に将来を意識した専門教育の概論を行うプログラムである。結果は3パターンあるらしい。1) 入学前と卒業後のイメージが一致するタイプ（例：医学部学生は）。2) 入学前に抱いていたイメージが崩れるタイプ（例：心理学を学びに入ったが将来はカウンセラーしかないんだとがっかりする）。3) 入学前に考えても見なかった将来があることに気付かされたタイプである。

### 【基調講演】「大学生の学びとこれからの教養教育」[1階 大ホール]

講演講師 森本 あんり（国際基督教大学・学務副学長）

<大学紹介> 創立62年、学部大学院生3000名：教員160（18：1）生物化学物理を含むリベラルアーツを標榜する大学である。リベラルアーツは理系を含まなければならないのは現代の常識と言われている。入学時に選考を決めず授業を取りながら2年後期にメジャーを決める。学生は専門が足りないと感じているため、文系3割、理系8割の進学率とのこと。「大学院に行くと生涯学習を続けることにつながる」という結果は興味深かった。わたしの研究室はここ3年の進学率が約5割で推移しているので、このフレーズは魅力的であった。今後はBAでは通用しなくなっている。よって今後はMAが常識になってくるだろう。と言われていた。1科目50名以下が8割（9名以下1割）、最大150名授業が3%。大きなクラスでも授業参加の意識の割合が高い。

<本題> 反知性主義（著書）とは相手の知性の欠如を批判するが日本の捉え方。由来は独立前のピューリタリズム、説教運動（プロテスタント）が蔓延している。当時のピューリタンは大学卒（ハーバード大、元々は牧師養成）で識字率が高かった。宗教的にも社会的にも権威を持っていた。しかし、全ての人が、教養が高かったわけではなかった。その反発のリーダーが巡回宣教師（教養はないが宗教心が強い、話が上手=エンタテナー的）である。インテリ牧師が詰め寄るが、信仰は学があるなしではない。そもそもイエスが批判したの



は学者人である。知性は権威とむすびつきやすく、一旦結びつくと維持するよう行動する。エリートがエリートを再生する。これに対する本質的な反知性主義である。ハーバード、イエール、プリンストン主義に反対して知性の固定化に対する挑戦が反知性主義とのこと。〈高大接続について〉 大学が高校の延長になると学生の学びの意欲がなくなる。新しい世界が実感できれば学生は勉強するようになる。総じて、現在は親切すぎる。自律的で主体的な人間にならない。自分で考えその手助けをするというスタンスが重要。本来、初等中等教育と大学は別の流れから生まれたので接続すること自体が間違っている。現代は直列的になってきている。高校と違う根本的な何かを提示しない限り大学は生き残れない。フンボルトは知識の伝達では無く自律的な研究者を育てることを追求し、これを体現したのがゼミナール。当然、これは少人数でなければならない。高校の延長では無く不連続があっても良いのではないか、これが今後の大学改革に必要と思われる。

〈今後の大学〉 自ら学び自ら考えることができることを目指すリベラルアーツは小規模私立だけだったが、最近は大規模大学にまで広がってきている。これは時代とともに文化が変わってきているためである。知性は人間にしか使われない。再帰的に用いる能力である。知能は機械コンピュータに使う。知能犯はいるが知性犯はいない。人間にしか適用できない単語である。大学の最終的な目標は総合的に人格的に批判的に振り返る能力である知性である。

最近企業への要請でリベラルアーツを期待している。大学で専門知識を詰め込んでも短期間で陳腐化するため、役に立たなくなる。現在の小学生が大学を出た時に就く職業の3割は現在ない職業である。教養を身につけるとは何か？知識はどのように持つかを捉えること。特定のサブジェクトでは無くどう教えるかどう学ぶかである。リベラルアーツは人格に深く影響を与える思想の軸となるものである。

15：30～18：00

【開催校企画シンポジウム】 [1階 大ホール]

テーマ：「学び方・考え方の転換—知識伝達を超えた大学教育と支援」

「教育ごっこを超える可能性はあるのか？」鈴木（青山学院）：

練習に使った問題に近ければできる。大学でよく言われる企画力、自主性などの教育は極めて難しい。レポートライティングを散々やった。学生は教育学部なので真面目だから淡々とやるし、一定の効果もあるけど何かが違う。要素課題を全部できるようにすればそれで良いのか？佐伯（1975）は熱を出させる、頭痛をさせる。だるさを生じさせると説明した。これは風邪の症状と同じだけど、これは風邪になるのか？にたち戻る。人が学ぶ動機は競争と理解と感染と同じに近い。

**「学生の学び方を変えるアクティブラーニングの課題」中井（愛媛大）：**

アクティブラーニングは学生のためであるが、中身は教員向けと研究者向けがほとんど。これまで通りの受け身型は覚えて終わったら開放感に満ちる。最近流行りの活動フィールド型は結局何が身についたのかわからない。ALの定義が曖昧である。講義形式が良いという学生が8割いるbyベネッセ情報。今後の人生で全く無意味なことも人は知りたくなる。これをアクティブラーニングに取り入れることも良い。発問法という古い本と関係がある。つまり発問の種類があり組み合わせて経験学習もできる。教授法が変わればどう変わり、授業時間外の学習がどうなるのか？それは、1) 勉強スキルが上がる。2) 成果だけでなく方法も学ぶようになる。3) 自律的に学ぶようになる。とのこと。

教員がそもそも学び方を変えたいのか？総論賛成だが、到達目標でないので葛藤が生じる。学生は学習の学び方を変えたいのか？：やりたいけど葛藤が生じる。

**「大学において教育や学習を支援するという事」竹内（千葉大）：**

学習環境と支援というキーワードにフォーカスする。学修支援の専門職職員の配置状況；情報通信・IT・キャリア教育のウエイトが大きい。千葉大は図書館を中心に学修にどのように活かせるかを考えている。それには人的支援が重要であり、その人を要請することが先で、スキル標準が必要である。問題は幅広い（キャリア、教務、生活支援、グローバル、学習支援相談など）ため、オーバーラップ部分を文献・インタビュー・アンケート調査から抽出して調べて専門性を明らかにした。実際に、大きく7つの能力項目を出して、能力フーブリック（25種180特性）においてS,A,B,Cにランク化して専門性を実践に落とし込むことで可能となる。このような方法は、やがては制度化の方向に進むと考えられる。

**森本（ICU）**

主体的な学習と言われながら、教える側は数値化され、やらされている感がある。ところが、学生Cは授業でノートを取らない。こっちを見て必死に考えている。この学生の頭の中は最高にアクティブになっている。こういう子は授業後に図書館に行って調べる。これが感染動機で、これが最高ではないだろうか？授業はナマモノである。そこで没頭していること。これがアクティブラーニングではなかろうか？エンチャンティングである。

**以下が討議内容**

Q：将来計画の履修証明プログラム（専門職）に関して

A：（竹内）120時間という短期間でできるのか？OJT的に学んだことをプログラムでより知識

を深めてもらう。これがゴールではないのでここをスタート地点と考えてもらえれば良い。

Q：具体的にどういう人材

A：(竹内) 教育と実践の現場をサポートできる人材

Q：発問に対してどうしてフィードバックするのか

A：(中井) 発問と指示がセットになっていることを理解した方が良い。ソクラテス問答法ではない。やればやるほど時間がかかるし、回答が減る。発問するだけでも意味があると思う。

Q：ALの歓迎しない学生への対処法

A：(中井) 経験値が足りないので少しずつ。特別な場合は大学がサポートするしかない。楽しんで卒業したい学生は学ぶ意義を伝えるしかない。対応しにくい学生は明日のセッションでも行う。

Q：ALは手段で目的になることを危惧している

A：(中井) ALの定義が難しい。ALを入れるから授業の目標が変わるのはおかしい。

Q：ALに関して

A：(鈴木) 素材を煮るのがいいのか焼くのがいいのか言えない。物によりしか言えない。ここにいる人は研究の面白さ美しさを体感していると思う。そういうものを見せられるのか？アクティブでやれるならすばらしい。講義でやれるなら講義でやればいい。わかんないけどなんか面白そうだから熱中している。子供が言葉を理解していないのに入り込んでいける世界を見せなければならない。基礎からやらせることは教育ごっこではないか？

Q：ALの推進は質的に変えるべきなのか

A：(中井、竹内) AL推進派ではない。講義も大事、ALも大事。どっちがいいかは自分が選択するしかない。ALをどのように理解しているかで違う。教育の理念として自律的に学ぶことをALと捉えている。刺激を提供の一つ。教授法のALではないのではないか。

Q：何かの課題ができるできないはどう考えるのか

A：(鈴木) 課題を解決するための言語化された知識などで明示化できないのではないか。「できる」を伴うがその反対が「できない」ではない。全てのことに対処するスキルを持つことは不可能である。

Q：できるからわかるで、十分では？

A：(鈴木) 制度とかカリキュラムは考えない。

Q：蓄積の学びから解放できるのか

A：(鈴木) ALがダメというわけではない。発表させたよね。議論させたよね。というルーブリックありきの文科省的なことはおかしい。自律的な授業の組み立てが壊されていく感じがする。

Q：ICTではできてもそれ以外の低い学校でもできるのか

A：(森本) 可能だと思う。コミュニティカレッジでも行われるべきことだと思う。もちろん、目標は違う、新しい気づき生まれるはず。進学率5割超えている。高校授業をどれだけクリアしているのかを図るのは無理である。入試で大学への接続は機能しない。だからAOが機能しない。こんな入試はやめた方が良い。

Q：感染動機を起こさせるのがALと思うけど教員を超えろと教えているので感染の一步先は何か

A：(森本) 圧倒的な力を見せつけられたこと自体が大切。そういう先生に出会えたことは恵まれている。私自身現在はずでに超えられている。

12月4日(日)

9：30～12：00

【課題研究シンポジウムI】[1階 大ホール]

テーマ：「アクティブラーニングの効果検証」

司 会：溝上 慎一(京都大学)

「アクティブラーニング指標としてのアクティブラーニング外化尺度の理論と尺度開発」

溝上 慎一(京都大学)

ALの理論的整備を行なっている。効果指標と問題点は、書きださせて記憶が定着して長さをみている。1) 授業外時間が伸びる。2) 学習のアプローチ。3) クラス全体の成績が上がる(下が消えていく)。4) 得点合格率が上がる。これらがゴールであればALでなくても良い。ALにおいて生じる認知思考プロセス(内化・外化)で多くのデータを分析すると内化と外化が分かれると思ったが一般には分かれなかった。ただ、外化に関連する内化のグループ因子がある。外部変数と関連があると思う。

「これまでのプレポスの調査結果から見たアクティブラーニングの効果」

紺田 弘明(関西大学) 登壇者変更

量的観点と授業外学習(予習復習)からプレポスト調査、アプローチづき、予習の仕方、AL尺度を分析している。キーワードとして、深い学習アプローチ～浅い学習アプローチ、積極的関与～継続的関与～ペアグループメンバ、に対する考え方(仲間として、人を道具として)である。授業デザインワークシートで授業外学習に着目し、深い学習アプローチとALの外化

が有効である。ただし、標本数が多くなると優位になるので効果量で見ると良い。ALプレボストは、授業外で予復習していない学生は落ちている。どちらかしかしていない学生は同じで、予復習している学生は上昇が見られ、浅い学習は30分以内が上昇した。「授業デザインの知見整理」と「AL授業で起きていることのモデル化」と「個人単位と授業単位での結果からマルチレベル分析」がポイントである。

#### 「質的データから見るアクティブラーニングの効果」

森 朋子 (関西大学)

1) 習得型 (内化・知識定着型) と 2) 活用法 (外化・問題解決型) がある。ただし、習得～活用～探求の流れが重要である。習得型でうまくいっているパターンがある。それは、わかったつもりをそのように作るか。わかったつもりをわかったにどのように導くかである。それには内化と外化の往還がポイントになる。つまり、「内化～外化～内化」の流れと「個人～グループ～個人」はセットで考えると良い。そして、「わかったつもり～葛藤～わかった」が定着とコンピテンシー効果がある。ALは一般に「内化～外化」で終わっている。ただし、ALで授業の密度や参加意識が上がったけど成績は若干しか上がらない。中でも下位層は効果があったことが大きい。成績が伸びた学生は苦しいけど楽しかったというコメントの人が多い。一例として、Aランク大学において反転授業で教科書を使って勉強した。その結果、レディネスの向上と予習の質に相関があるのか? であるが、結論としてアクティブラーニング (外化) が内化を促進すると思われるとのこと。

#### 「グループワークにおける主体性と学習効果」

山田 邦雅 (北海道大学)

フルライド調査とログに現れる態度と習慣を調査した。従来研究は無気力感の研究があった。これは授業、学業、学生生活からの退却だった。フリーライダー：学習する気がないが退却もしないただ楽な授業を取る。主体性を求めないと認識している。時々やりたくないけど点数が欲しい強欲な学生もいる。(クラブ熱中者) これを、無断欠席、分担やらず、興味なし、単位ギリギリなどで数式化する。フリーライダーを集めることから始める。主体性の低さに注目するために、A提出物なし、B出席率低い、から抽出する。一般学生も非常に控えめに回答するため探しにくく、グループ内の他者評価を匿名で評価している。このような評価をすると、演技性 (良いフリをする) アクティブラーナーが出現してくる。よって、線形近似が良いものを選ぶことにした。資料のDLアクセス日時をチェック、課題は締め切り直前にすることが多かったというアンケートとの相関を比較する。

現在、FRの他者への悪影響を調べている。因子分析、その因子に差があるのか? 調べた結果、モチベーションに関係がある (FR在籍すると下がる) か否か。FRではない学生から見た

FRの悪いところを1、正当な理由なく遅刻（プラス値）、2、態度考えが成長（マイナス値）、3、グループ形式の価値理解（マイナス値）と捉えている。

小職がMoodleを使って研究を行っている内容と分析に近いため、講演後、名刺交換を行なった。FRは現時点の大学教育には悪であり、FRにやる気に向けさせることは不可能ということでは合意。このFRを研究対象としてどう扱うのか意見をお聞きした。

13：00～15：30

### 【STEM教育シンポジウム】 [1階 大ホール]

テーマ：「現代のリベラルアーツとしての理数工系科目（STEM）の開発と教育実践のために」

司会者：細川敏幸（北海道大学）

サブテーマ1：現代人に必須の数学リテラシー科目のティーチング・ティップス。

講演者：川添 充（大阪府立大学）

サブテーマ2：文理融合の新しいSTEMプログラムの開発。

講演者：羽田貴史（東北大学）、山田礼子（同志社大学）。

講演者：川添 充（大阪府立大学）

サブテーマ2：文理融合の新しいSTEMプログラムの開発

STEM（Science, Technology, Engineering and Mathematics）プロジェクトの目的は数学の知識を現実の課題の解決を行うこと。文系学生を対象とする授業に適したものでティップス収集しデータベース共有化して数学的リテラシー教育の普及に貢献すること。

大学レベルの数学リテラシーとは一定レベルの専門的なものの見方ができることであり、よりレベルの高い数学が必要な現実世界の課題解決に数学の力を用いる能力としている。具体的には、指数対数三角関数によるモデル化、微分方程式、多変数関数、行列によるモデル化、ベイズ推定、統計などが使えること。

しかしながら、問題点は、1）世界的に見ると違った方向を日本はとっていること。2）理系文系に分かれていること。3）文系コースは数学教育の機会がないこと。4）理系コースでも専門内は学ぶが、狭い範囲の力しかついていないこと。過去には2007年の国立教育政策研究所の報告では日常生活で役に立たないと考えられていた。また、数学と現実を教える高校教員がいない上に、多くの学生は日常生活で活用することができないという状況である。さらに、1）文系は講義が少ない。2）必要性を認識していない。3）数学者の多くは数学の応用に関する知識が少ない。4）数学教育の困難性。5）数学不安、数学学習に対する動機の少なさ。6）教材開発準備の負担が大きいなどがあげられる。また、日本では、ゆとりの9年間のラグが教

育に関しての関心を無くした。「何を教えるか」より「何ができるか？」が国際的な流れであるが、実は何の根拠もないとのこと。

改善の方策として、少数派ではあるがそういう意識を持った先生はいる。実践や教材を共有することで普及に推進することができないか共有の方法としてティップスや教材のデータベースを作ることから始めるがティップスをどうやって集めるのかが課題。(例Klein project blog)

各国の科学技術政策を見ると、起業家精神を持つようなSTEMリテラシーを持つ人の多い。アメリカではPCAST 2010,2012などが参考。STEMへの進学する学生増加とドロップアウトの支援、STEMにおける女子とマイノリティの増加支援、STEMと他分野の融合促進、STEM内容の改革と統合性、STEMのリサーチグラウンド充実化、STEMにおけるデザイン思考の取り入れと奨励などがあり、スーパーグローバル選定大学が活発に活動しているとのこと。

### 【課題研究シンポジウムII】 [3階 レセプションホール]

テーマ：「発達障害学生への学生支援・大学教育の役割」

司会者：望月由起（昭和女子大学）、青野 透（徳島文理大学）

シンポジスト：青野 透（徳島文理大学）「障害者差別解消のための「国立大学職員対応要領」

枝廣 和憲（立命館大学大学院・岡山大学）「国立大学の発達障害学生支援（1）」

小川 勤（山口大学）「国立大学の発達障害学生支援（2）」

渡部 みさ（首都大学東京）「公立大学の発達障害学生支援」

山中 淑江（立教大学）「私立大学の発達障害学生支援」

指定討論者：吉武 清實（東北大学）、沖 清豪（早稲田大学）

まずシンポジウム企画者でもある青野氏が、発達障害学生への対応事例を抜粋して紹介した。「合理的配慮」は各大学の判断で行なわれるものであるが、他大学で対応したにもかかわらず、自大学では対応しない、という判断をする場合は、「なぜできないのか」の説明責任が生じるだろう。そのため、各大学が対応事例を公表し、その情報を大学間で共有していく仕組みが必要である。

以上の趣旨を受けて、枝廣氏、小川氏、渡部氏、山中氏が、それぞれ勤務大学での支援体制について具体的に説明した。

岡山大学では、全学的な支援室を設定しているものの、支援の責任は障害学生が所属する各学部に置き、支援室はその学部を支援する、という体制をとっている。また一般学生にも支援に関わってもらうために、教養教育の科目に「アクセシビリティ実習」を設け、訓練も実施している。

山口大学でも、全学的な支援室を設けているが、そこに任せきりにならないよう、学部・研究科との連携を進めている。また一大学でできる支援は限られているので、地域の支援組織と障害学生がつながっていけるよう、体制を構築中である。

首都大学東京は、都立大学時代から少人数教育が特色であり、法律施行前から障害学生への支援を積極的に行なってきた。現在は全学組織として「ダイバーシティ推進室」が設けられ、学生・教職員を問わず、様々な困りごと（性差や文化の違い等を含む）を相談できる体制になっている。

立教大学では、「しょうがい学生支援室」が中心となって支援が実施される。学生本人との面談を受けて支援室が専門委員会を開き、その後関係部局との面談を経て、最終的な支援内容を決定する。なお、診断を受けていなくても、相談があれば対応する。

発表後の議論では、発達障害特有のコミュニケーション障害が話題になった。本人からの相談がないと支援が始まらないのだが、他者との関わりが苦手であれば、相談という発想を持ちにくい。よって相談につながりやすくする手立てを考える必要がある。また指定討論者からは、発達障害学生への支援に協力しようとする教職員は少数であり、また一般学生の多くも身近な問題として捉えていない、という現実が指摘された。法律の施行により、障害をもつ人とともに働く可能性は今度増える。よって、この問題を学ぶ機会を大学の教養教育の中に設ける必要があると思われる。

#### 4. 第24回大学教育研究フォーラム

会 場：京都大学 吉田南1号館キャンパス

会 期：2017年3月19日(日)～20日(月)

主 催：京都大学高等教育研究開発推進センター

参加者：千葉昭彦、片瀬一男



## 教育研究所購入図書一覧（2006年以降）

教育研究所の所蔵図書の閲覧を希望される教職員の皆様は、当研究所までお申し出ください。所定の手続きを踏まえて貸出をしております。

### 2016年度購入図書一覧（和書・順不同）

- ・ たったひとつを変えるだけ、ダン・ロスステイン、ルース・サンタナ、新評論、2016年
- ・ 大学入試改革、読売新聞教育部、中央公論社、2016年
- ・ なぜ「教えない授業」が学力を伸ばすのか、山本崇雄、日経BP社、2016年
- ・ ファシリテーションで大学が変わる、中野民夫、ナカニシヤ出版、2016年
- ・ 大学のアクティブラーニング、河合塾、東信堂、2016年
- ・ アクティブラーニングを創るまなびのコミュニティ、池田輝政・松本浩司、ナカニシヤ出版、2016年
- ・ 「主体的学び」につなげる評価と学習方法、J.ウイルソン、東信堂、2016年
- ・ アクティブラーニングを支えるカウンセリング24の基本スキル、小林昭文、ほんの森出版、2016年
- ・ アクティブラーニング 大学の教授法3、中井俊樹、玉川大学出版部、2015年
- ・ 主体的学び4号 アクティブラーニングはこれでいいのか 主体的学び研究所、東信堂、2016年
- ・ アクティブラーニングのデザイン 永田敬・林一雅、東京大学出版会 2016年

### 2015年度購入図書一覧（和書・順不同）

- ・ 高等教育の社会学、パトリシア・J・ガンポート、玉川大学出版部、2015年
- ・ 大学教育の変貌を考える、三宅義和、ミネルヴァ書房、2014年
- ・ 大学生の学習ダイナミクス、河井亨、東信堂、2014年
- ・ 大学は社会の希望か、江原武一、東信堂、2015年
- ・ 大学改革を問い直す、天野郁夫、慶応義塾大学出版会、2013年
- ・ アウトカムの基づく大学教育の質保証、深堀聰子、東信堂、2015年
- ・ 大学のIR Q&A、中井俊樹、玉川大学出版部、2013年
- ・ 大学版IRの導入と活用の実際、佛淵孝夫、実業之日本社、2015年
- ・ 「深い学び」につながるアクティブラーニング、河合塾、東信堂、2013年
- ・ ラベルワークで進める参画型教育、林義樹、ナカニシヤ出版、2015年

- ・未来の大学教員を育てる、田口真奈、勁草書房、2013年
- ・協働で学ぶクリティカル・リーディング、館岡洋子、ひつじ書房、2015年
- ・立命館大学（IR方式・センター試験併用方式）、数学社編集部、数学社、2015年
- ・アカデミック・アドバイジング、清水栄子、東信堂、2015年
- ・主体的学びにつなげる評価と学習方法、スー・フォスタティ・ヤング、東信堂、2013年
- ・主体的学び創刊号パラダイム転換、主体的学び研究所、東信堂、2014年
- ・主体的学び2号反転授業がすべてを解決するのか、主体的学び研究所、東信堂、2014年
- ・主体的学び3号アクティブラーニングとポートフォリオ、主体的学び研究所、東信堂、2015年
- ・思考し表現する学生を育てるライティング指導のヒント、関東地区FD連絡協議会、ミネルヴァ書房、2013年

#### 2014年度購入図書一覧（和書・順不同）

- ・シリーズ大学7巻対話の向こうの大学像、広田照幸、岩波書店、2014年
- ・高等教育研究 第1集、日本高等教育学会、玉川大学出版部、1998年
- ・高等教育研究 第2集、日本高等教育学会、玉川大学出版部、1999年
- ・高等教育研究 第3集、日本高等教育学会、玉川大学出版部、2000年
- ・高等教育研究 第4集、日本高等教育学会、玉川大学出版部、2001年
- ・高等教育研究 第9集、日本高等教育学会、玉川大学出版部、2006年
- ・高等教育研究 第10集、日本高等教育学会、玉川大学出版部、2007年
- ・高等教育研究 第11集、日本高等教育学会、玉川大学出版部、2008年
- ・高等教育研究 第13集、日本高等教育学会、玉川大学出版部、2010年
- ・高等教育研究 第14集、日本高等教育学会、玉川大学出版部、2011年
- ・高等教育研究 第16集、日本高等教育学会、玉川大学出版部、2013年
- ・高等教育研究 第17集、日本高等教育学会、玉川大学出版部、2014年
- ・現代教育制度改革への提言 上、日本教育制度学会、東信堂、2013年
- ・現代教育制度改革への提言 下、日本教育制度学会、東信堂、2013年
- ・ディープアクティブラーニング、松下佳代、勁草書房、2015年
- ・アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換、溝上慎一、東信堂、2014年
- ・教育方法原論、吉田卓司、三学出版、2013年
- ・学びの質を保証するアクティブラーニング、河合塾、東信堂、2014年
- ・学生の理解を重視する大学授業、ノエル・エントウイスル、玉川大学出版部、2010年

- ・アメリカ研究大学の大学院、阿曾沼明裕、名古屋大学出版会、2014年

### 2013年度購入図書一覧（和書・順不同）

- ・大学入試の終焉、佐々木隆正、北海道大学出版会、2012年
- ・大学の教務Q & A、中井俊樹、玉川大学出版部、2013年
- ・シリーズ大学1巻グローバル化と大学、吉田文、岩波書店、2013年
- ・シリーズ大学2巻大衆化する大学、濱中淳子、岩波書店、2013年
- ・シリーズ大学3巻大学とコスト、上山隆大、岩波書店、2013年
- ・シリーズ大学4巻研究する大学、小林傳司、岩波書店、2013年
- ・シリーズ大学5巻教育する大学、広田照幸、岩波書店、2013年
- ・シリーズ大学6巻組織としての大学、広田照幸、岩波書店、2013年
- ・大学生のための「社会常識」講座、松野弘、ミネルヴァ書房、2011年
- ・大学生活を楽しむ護身術、宇田光、ナカニシヤ出版、2012年
- ・大学1年生からのコミュニケーション入門、中野美香、ナカニシヤ出版、2010年
- ・大学生からのプレゼンテーション入門、中野美香、ナカニシヤ出版、2012年
- ・新編大学学びのことはじめ、佐藤智明、ナカニシヤ出版、2011年
- ・理工系学生のための大学入門、金田徹、ナカニシヤ出版、2012年
- ・プロフェッショナル・ディベロップメント、安藤厚、北海道大学出版会、2012年
- ・航行をはじめた専門職大学院、吉田文、東信堂、2010年
- ・日本とドイツの教師教育改革、渡邊満、東信堂、2010年
- ・教員養成学の誕生、遠藤孝夫、東信堂、2007年
- ・教育機会均等への挑戦、小林雅之、東信堂、2012年
- ・アメリカ連邦政府による大学生経済支援政策、犬塚典子、東信堂、2006年
- ・現代アメリカにおける学力形成論の展開、石井英真、東信堂、2011年
- ・アメリカ公民教育におけるサービス・ラーニング、唐木清志、東信堂、2010年
- ・ソーシャルキャピタルと生涯学習、ジョン・フィールド、東信堂、2011年
- ・ノンフォーマル教育の可能性、丸山英樹、新評論、2013年
- ・日本の社会教育・生涯学習、小林文人、大学教育出版、2013年

### 2012年度購入図書一覧（和書・順不同）

- ・比較教育学事典、日本比較教育学会編、東信堂、2012年
- ・大学のカリキュラムマネジメント－理論と実際－、中留武昭著、東信堂、2012年

- ・学生の学力と高等教育の質保証<1>、山内乾史緒、学文社、2012年
- ・教育学年報〈9〉大学改革（教育学年報9）、藤田 英典（編集）、片桐 芳雄（編集）、黒崎 勲（編集）、佐藤 学（編集）、世織書房 2012年
- ・高等教育論入門、早田 幸政（編集）、青野 透（編集）、諸星 裕（編集）、ミネルヴァ書房、2010年
- ・ボランティア教育の新地平、桜井 政成（編さん）、津止 正敏（編さん）著、ミネルヴァ書房 2009年
- ・大学生のためのリサーチリテラシー入門、山田剛史、林創著、ミネルヴァ書房、2011年
- ・大学における学習支援への挑戦、日本リメディアル教育学会監修、ナカニシヤ出版、2012年
- ・大学と変える大学教育、清水亮、橋本勝、松本美奈編、ナカニシヤ出版、2009年
- ・学生主体型授業の冒険、小田隆治、杉原真晃編著、ナカニシヤ出版、2010年
- ・大学におけるキャリア教育の実践、小樽商科大学地域研究会編 ナカニシヤ出版、2010年
- ・大学生のためのデザインキャリア、渡辺三枝子、五十嵐浩也、田中勝男、高野澤勝美著、ナカニシヤ出版、2011年
- ・大学生のキャリア発達、宮下一博著、ナカニシヤ出版、2010年
- ・協同学習の技法、E.F.Barkley/K.P.Cross/C.H.Major著、ナカニシヤ出版、2009年
- ・実践！アカデミックディベート、安藤香織、田所真生子編、ナカニシヤ出版、2002年
- ・生成する大学教育学、高等教育研究開発推進センター編、ナカニシヤ出版、2012年
- ・学生・職員と創る大学教育、清水亮、橋本勝編、ナカニシヤ出版、2012年
- ・学生の納得感を高める大学授業、山地弘起、橋本健夫編著、ナカニシヤ出版、2012年
- ・グローバルキャリア教育、友松篤信編、ナカニシヤ出版、2012年
- ・大学教育の臨床的研究 田中每実著、東信堂、2011年
- ・スタンフォード21世紀を創る大学、ホーン川嶋瑤子著、東信堂、2012年
- ・学士課程教育の質保証へむけて、山田礼子著、東信堂、2012年
- ・大学自らの総合力、寺崎昌男著、東信堂、2010年

#### 2011年度購入図書一覧（和書・順不同）

- ・批判的思考力を育む、楠見 孝、子安 増生、道田 泰司、有斐閣、2011年
- ・高等教育室保証の国際比較、羽田 貴史、杉本 和弘、米澤 彰純、東信堂、2009年
- ・私立大学の経営と拡大・再編、両角亜希子、東信堂 2010年
- ・学習経験をつくる大学授業法、L. デイー・フィンク、玉川大学出版部、2011年

- ・変貌する世界の大学教授職、有本 章、玉川大学出版部、2011年
- ・学級経営読本、小島 宏、玉川大学出版部、2012年
- ・転換期日本の大学改革、江原 武一、東信堂、2010年
- ・成績評価の厳格化と学習支援システム 半田 智久、地域科学研究会 2011年
- ・リーディングス 日本の教育と社会―⑫高等教育 塚原 修一、広田 照幸、日本図書センター、2009年

#### 2010年度購入図書一覧（和書・順不同）

- ・大学の反省、猪木武徳、NTT出版、2009年
- ・2011年版大学ランキング、週刊朝日進学MOOK、2010年
- ・初年次教育でなぜ学生が成長するのか、河合塾、東信堂、2010年
- ・学力問題のウソ、小笠原喜康、PHP研究所、2008年
- ・大学とキャンパスライフ 武内清 上智大学出版 2005年
- ・リーディングス 日本の教育と社会―第1巻 学力問題・ゆとり教育、中村高康編、玉川大学出版部、2010年
- ・リーディングス 日本の教育と社会―第3巻 子育て・しつけ、橋本鉦市編、玉川大学出版部、2010年
- ・リーディングス 日本の教育と社会―第5巻 大学と学問、阿曾沼明裕、玉川大学出版部、2010年
- ・リーディングス 日本の教育と社会―第6巻 歴史教科書問題、村澤昌崇編、玉川大学出版部、2010年
- ・大学と社会、安原義仁、放送大学教育振興会、2008年
- ・高等教育質保証の国際比較、羽田貴史、東信堂、2009年
- ・私立大学の経営と拡大・再編、両角亜希子、東信堂、2010年
- ・戦後日本産業の大学教育要求、飯吉弘子、東信堂、2008年
- ・大学教育を科学する、山田礼子、東信堂、2009年
- ・大学における書く力考える力、井下千以子、東信堂、2008年
- ・2010年版大学ランキング、朝日新聞出版、2009年
- ・「教育改革」と労働のいま、日本社会臨床学会、現代書館、2008年
- ・国際移動と教育、江原裕美、明石書店、2011年
- ・グローバル化時代の教育の選択、増淵幸男、上智大学出版、2010年
- ・大学の危機、草原克豪、弘文堂、2010年

- ・教育用語辞典、山崎英則編、ミネルヴァ書店、2003年
- ・教育学をひらく、鈴木敏正、青木書店 2009年
- ・「教育」としての職業指導の成立、石岡学、勁草書房、2011年
- ・大学を変える、東海高等教育研究所、大学教育出版、2010年
- ・シティズンシップへの教育、中山あおい、新曜社、2010年
- ・学校の挑戦、佐藤学、小学館、2006年
- ・教師花伝書、佐藤学、小学館、2009年
- ・リーディングス日本の教育と社会―③子育て・しつけ、広田照幸、日本図書センター、2007年
- ・リーディングス 日本の教育と社会―⑤愛国心と教育、大内裕和、日本図書センター、2007年
- ・リーディングス 日本の教育と社会―⑥歴史教科書問題、三谷博、日本図書センター、2007年
- ・リーディングス 日本の教育と社会―⑦子どもと性、浅井春夫、日本図書センター、2007年
- ・リーディングス 日本の教育と社会―⑧いじめ・不登校、伊藤茂樹、日本図書センター、2007年
- ・リーディングス 日本の教育と社会―⑨非行・少年犯罪、伊藤茂樹、日本図書センター、2007年
- ・リーディングス 日本の教育と社会―⑩子どもとニューメディア、北田暁大・大多和直樹、日本図書センター、2007年

#### 2009年度購入図書一覧（和書・順不同）

- ・資料で読む戦後・日本と愛国心 第一巻、市川昭午、日本図書センター、2008年
- ・資料で読む戦後・日本と愛国心 第二巻、市川昭午、日本図書センター、2009年
- ・資料で読む戦後・日本と愛国心 第三巻、市川昭午、日本図書センター、2009年
- ・論文を書くためのWord利用法、くろしお出版、2009年
- ・知のナビゲーター、くろしお出版、2007年
- ・知へのステップ 改訂版、くろしお出版、2006年
- ・知のワークブック、くろしお出版、2006年
- ・落下傘学長奮闘記 黒木登志夫、中央公論新社、2009年
- ・最新教育データブック 第12版、清水一彦、時事通信出版局、2008年

- ・ アカデミック・ポートフォリオ、ピーター・セルディン、玉川大学出版部、2009年
- ・ 基礎からわかるポートフォリオのつくり方・すすめ方、佐藤真、東洋館出版社、2002年
- ・ 国民国家システムの変容、吉川宏、学術出版会、2008年
- ・ アメリカの大学開放、五島敦子、学術出版会、2008年
- ・ 近代日本教育会史研究、梶山雅史、学術出版会、2007年
- ・ 臨時教育審議会、渡部蕪、学術出版会、2006年
- ・ 大学英語教育における教授手段としてのポートフォリオに関する研究、峯石緑、溪水社、2002年
- ・ 大学の實力、読売新聞社、中央公論新社、2009年
- ・ 大学を語る 22人の学長、玉川大学出版部、1997年
- ・ 大学個性化の戦略、玉川大学出版部、2000年
- ・ 大学教師の自己改善、玉川大学出版部、2000年
- ・ 大学進学の世界、小林雅之、東京大学出版会、2009年
- ・ 21世紀の教育を拓く、山田耕路、西日本新聞社、2009年
- ・ 高等教育質保証の国際比較、羽田貴史、東信堂、2009年
- ・ 教育とエビデンス、経済協力開発機構、明石書店、2009年
- ・ 教育研究ハンドブック、立田慶裕。世界思想社、2008年
- ・ キャリア教育概説、日本キャリア教育学会、東洋館出版社、2008年
- ・ 変貌する日本の大学教授職、有本章、玉川大学出版部、2008年
- ・ 統計学から計量経済学入門、藤山英樹、昭和堂、2007年
- ・ 批判的リテラシーの教育、竹川慎哉、明石書店、2010年
- ・ 転換期を読み解く、潮木守一、東信堂、2009年
- ・ リーディングス 日本の教育と社会 第1巻、学力問題・ゆとり教育、広田照幸、日本図書センター、2009年
- ・ リーディングス 日本の教育と社会 第2巻、学歴社会・受験戦争、広田照幸、日本図書センター、2007年
- ・ リーディングス 日本の教育と社会 第4巻、教育基本法、広田照幸、日本図書センター、2006年
- ・ リーディングス 日本の教育と社会 第12巻、高等教育、広田照幸、日本図書センター、2009年

## 2008年度購入図書一覧（和書・順不同）

- ・学力低下は錯覚である、神永正博、森北出版、2008年（第9号に書評掲載）
- ・国立大学・法人化の行方、天野郁夫、東信堂、2008年
- ・フンボルト理念の終焉？— 現代大学の新理念、潮木守一、東信堂、2008年
- ・教育人間論のルーマン、田中智志・山名淳、勁草書房、2004年
- ・他者の喪失から感受へ、田中智志、勁草書房、2002年
- ・大学生のための日本語表現トレーニングスキルアップ編、橋本修、三省堂、2008年
- ・自分 私を拓く、水原克敏、東北大出版、2003年
- ・三高の見果てぬ夢—中等・高等教育成立過程と折田彦市、巖平、思文閣出版、2008年
- ・札幌農学校と英語教育、外山敏雄、思文閣出版、1992年
- ・高等教育の経済分析と政策、矢野眞和、玉川大学出版部、1996年
- ・大学改革の海図、矢野眞和、玉川大学出版部、2005年
- ・教育社会の設計（UP選書）、矢野眞和、東京大学出版会、2001年
- ・入試改革の社会学、中澤渉、東洋館出版社、2007年
- ・大学とキャンパスライフ、武内清、上智大学出版、2008年
- ・学校システム論、竹内洋、放送大学教育振興会、2007年
- ・これからの教養教育—「カタ」の効用（未来を拓く人文・社会科学）、葛西康德、鈴木佳秀、東信堂、2008年
- ・団塊世代の同時代史（歴史文化ライブラリー）、天沼香、吉川弘文館、2007年
- ・戦後教育のなかの〈国民〉—乱反射するナショナリズム、小国喜弘、吉川弘文館、2007年
- ・知と学びのヨーロッパ史—人文学・人文主義の歴史的展開（MINERVA西洋史ライブラリー）、南川高志、吉川弘文館、2007年
- ・改めて「大学制度とは何か」を問う、館昭、東信堂、2007年
- ・原点に立ち返っての大学改革、館昭、東信堂、2006年
- ・30年後を展望する中規模大学マネジメント・学習支援・連携、市川太一、東信堂、2006年
- ・ティーチング・ポートフォリオ—授業改善の秘訣、土持ゲーリー法一、東信堂、2007年
- ・世界標準の読解力—OECD・PISAメットに学べ—、岡部憲治、白日社、2007年
- ・心理統計学の基礎—統合的理解のために、南風原朝和、有斐閣アルマSPECIALIZED、2002年
- ・実践的研究のすすめ—人間科学のリアリティ、小泉潤二・志水宏吉、有斐閣、2007年
- ・大学の学び・入門 大学での勉強は役に立つ！—、溝上慎一、有斐閣アルマINTEREST、2006年



- ・大学生の就職とキャリアー「普通」の就活・個別の支援、小杉礼子、勁草書房、2007年
- ・大学生の職業意識とキャリア教育、谷内篤博、勁草書房、2005年
- ・働く意味とキャリア形成、谷内篤博、勁草書房、2007年
- ・キャリア教育と就業支援、小杉礼子・堀有喜衣、勁草書房、2006年
- ・教育史研究の最前線、教育学史会編、日本図書センター、2007年
- ・資料で読む前後日本と愛国心〈第1巻〉復興と模索の時代一九四五～一九六〇、市川昭午、日本図書センター、2008年
- ・大学ランキング、「週刊朝日」進学MOOK、2008年
- ・日本の大学教授市場（高等教育シリーズ142）、山野井敦徳、玉川大学出版部、2007年
- ・ベストプロフェッサー（高等教育シリーズ）、ケン・ベイン、玉川大学出版部、2008年
- ・大学の英語教育を変える ―コミュニケーション力向上への実践指針、山地弘起、玉川大学出版部、2008年
- ・アメリカの学生獲得戦略（高等教育シリーズ）、山田礼子、玉川大学出版部、2008年
- ・大学教育を変える教育業績記録、ピーター・セルディン、玉川大学出版部、2007年

#### 2007年度購入図書一覧（和書・順不同）

- ・大学を解体せよ、中野憲志、現代書館、2007年
- ・大学図鑑！2008、オバタカズユキ、ダイヤモンド社、2007年
- ・学生諸君！ 夏目漱石他、光文社、2006年
- ・大学教育のエクセレンスとガバナンス、地域科学研究会、地域科学研究会、2006年
- ・教育学事始め、氏家重信、北大路書房、2007年
- ・学生による教育再生会議、東京学生教育フォーラム、平凡社新書、2007年
- ・大学改革の社会学、天野郁夫、玉川大学出版部、2007年
- ・大学のイノベーション、坂本和一、東信堂、2007年
- ・あたらしい教養教育をめざして、大学教育学会、東信堂、2004年
- ・学力を育てる、志水宏吉、岩波書店、2006年
- ・大学ランキング、2008年版、週刊朝日進学MOOK、朝日新聞社、2007年
- ・大学の教育力、金子元久、筑摩書房、2007年
- ・教育デザイン入門、実践的ソフトウェア教育コンソーシアム、オーム社、2007年
- ・大学改革その先を読む、寺崎昌男、東信堂、2007年
- ・大学卒業制度の崩壊、藤田整、文芸社、2007年
- ・大学教育の思想、絹川正吉、東信堂、2006年

- ・大学における初年次少人数教育と「学びの転換」、東北大学高等教育開発推進センター、東北大学出版会、2007年
- ・AO型入学選抜の多様な進化（上）、地域科学研究会、地域科学研究会、2000年
- ・AO型入学選抜の多様な進化（下）、地域科学研究会、地域科学研究会、2001年

#### 2006年度購入図書一覧（和書・順不同）

- ・恐るべきお子さま大学生たち、ピーター・サックス、草思社、2000年（第6集に内容紹介掲載）
- ・息子・娘を成長させる大学、読売新聞社、読売新聞社、2006年
- ・潰れる大学・伸びる大学辛口採点 2007年版、梅津和郎、エール出版社、2005年
- ・大学ランキング 2007年版、朝日新聞社、朝日新聞社、2006年
- ・危ない大学・消える大学 2007年版、島野清志、エール出版社、2006年
- ・大学改革の社会学、天野郁夫、玉川大学出版部、2006年
- ・大学生活ナビ、玉川大学コア・FYE教育センター編、玉川大学出版部、2006年
- ・大学論、エイブラハム・フレックスナー、玉川大学出版部、2005年
- ・プロフェSSIONAL化と大学、日本高等教育学会編、玉川大学出版部、2004年
- ・ヨーロッパの高等教育改革、ウーリッヒ・タイヒラー、玉川大学出版部、2006年
- ・アジアの高等教育改革、フィリップ・G・アルトバック&馬越徹編、玉川大学出版部2006年
- ・戦後日本の高等教育改革政策、土持 ゲーリー法一、玉川大学出版部、2006年
- ・私学高等教育の潮流、Ph.G・アルトバック編、玉川大学出版部、2004年
- ・高等教育 改革の10年、日本高等教育学会編、玉川大学出版部、2003年
- ・大学教育「教育評価ハンドブック、ラリー・キーク&マイケル・D・ワガナー、玉川大学出版部、2003年
- ・知識基盤社会と大学の挑戦、佐々木毅、東京大学出版会、2006年
- ・オランダの個別教育はなぜ成功したのか、リヒテル直子、平凡社、2006年
- ・じょうずな勉強法、麻柄啓一、北大路書房、2005年
- ・大学講義の改革、宇田光、北大路書房、2005年
- ・大学基礎講座 改増版、藤田哲也、北大路書房、2006年
- ・"学生"になる！、浦上昌則、北大路書房、2006年
- ・SD（スタッフ・ディベロップメント）が育てる大学経営人材、山本眞一、文葉社、2004年
- ・21世紀の大学職員像、立命館大学、かもがわ出版、2005年

- ・人が学ぶということ、今井むつみ、野島久雄、北樹出版、2003年
- ・研究計画書デザイン、細川英雄、東京図書、2006年
- ・これで書ける！大学院研究計画書攻略法、進研アカデミーグラデュエート大学部編、オクムラ書店、2002年
- ・大学力、有本章、北垣郁雄、ミネルヴァ書房、2006年
- ・大学激動、朝日新聞社、朝日新聞社、2003年
- ・大学事務職員のための高等教育システム論、山本真一、文葉社、2006年
- ・認知心理学者 新しい学びを語る、森敏昭、北大路書房、2002年
- ・授業を変える、米国学術研究推進会議、北大路書房、2002年
- ・学力低下論争、市川伸一、ちくま新書、2002年
- ・学ぶ意欲の心理学、市川伸一、P H P 研究所、2001年
- ・学ぶこと・教えること、鹿毛雅治、金子書房、1997年
- ・授業デザインの最前線、高垣マユミ、北大路書房、2005年
- ・教材設計マニュアル、鈴木克明、北大路書房、2002年
- ・大学講義の改革、宇田光、北大路書房、2005年
- ・教育力、斎藤孝、岩波新書、2007年

#### 所収和雑誌

- |                 |             |                 |
|-----------------|-------------|-----------------|
| ・ 大学教育学会誌       | 1980年～      | No.1～ (旧一般教育会誌) |
| ・ 大学資料          | 1989年～      | No.139～         |
| ・ 大学と学生         | 1989年～2011年 | No.397～565      |
| ・ 内外教育          | 1989年～      | No.4023～        |
| ・ 文部科学時報        | 1989年～2012年 | No.1344～1635    |
| ・ 教育委員会月報       | 1989年～      | No.465～         |
| ・ 教育情報パック       | 1990年～2007  | No.401～806      |
| ・ I D E—現代の高等教育 | 1991年～      | No.276～         |

#### 所収資料

- ・ 発達障害白書 1996年～2001年
- ・ 文部科学白書 1996年～ (旧我が国の文教政策)
- ・ 学校基本調査報告書 1992年～ (初等中等教育、高等教育)

## 既刊「教育研究所報告書」の主要内容

### 第16集 2016年3月

#### ○研究報告

- ・ 本学における不本意入学者の特徴（2）  
東北学院大学新入生意識調査の分析 2011-2015 神林 博史
- ・ 東北学院大学における教育の現状と課題  
—2009-14年度卒業時調査の分析— 片瀬 一男
- ・ ディープ・アクティブラーニングにおける複雑性の活用 松崎 光弘

#### ○報告

- ・ 英語教育センター発足までの経緯と初年度の活動 渡部 友子

### 第15集 2015年3月

#### ○研究報告

- ・ 本学における成績評価の現状—教員アンケート調査結果の概要— 斎藤 誠
- ・ 2014年度新入生意識調査から見た新入生の特徴と入学後成績の関係 神林 博史
- ・ 大学生生活の評価(2)—「2013年度卒業生意識調査」より 片瀬 一男
- ・ “TGベーシック”の現状と課題  
—カリキュラム導入からの2年を振り返って— 千葉 昭彦
- ・ 理科教育を考える 佐藤 篤

### 第14集 2014年3月

#### ○研究報告

- ・ 大学生生活の評価—「2012年度卒業生意識調査」より 片瀬 一男
- ・ 本学における不本意入学者の特徴：  
東北学院大学新入生意識調査の分析 神林 博史
- ・ 本学の共通英語教育のあり方を考える  
—英語教育の最近の動向を踏まえて— 渡部 友子

### 第13集 2013年3月

#### ○研究報告

- ・ 現実感をもった英語教育を：英語教育改革私案 渡部 友子

・「大学組織の意思決定における職員参加」調査報告 亀谷 純

○報告

・今回の本学教養教育改革について—その背景、意義と今後の課題— 斎藤 誠

第12集 2012年3月

○研究報告

・アカデミックスキル・ルーブリックの開発—初年次教育におけるスキル評価の試み—

葛西 耕市・稲垣 忠

○報告

・「学生生活実態調査」(2006年・2010年)にみられる本学学生の特徴

—私大連全体との比較の中で—

斎藤 誠

○書評

・今日の「大学改革」の可能性 —潮木守—『フンボルト理念の終焉?現代大学の新次元』  
を読んで— 千葉 昭彦

○シリーズ・東北学院大学の教育を考える 第3回

・教養教育雑感 —自然科学教員が見た大学教育—

高橋 光一

第11集 2011年3月

○研究報告

・初年次教育による高校と大学の接続—東北学院大学教養学部の場合—

片瀬 一男・葛西 耕市

・入試方法と学業成績—東北学院大学2009年度卒業生データの分析—

神林 博史

○報告

・2009年度「卒業時意識調査」報告

加藤 健二

○シリーズ・東北学院大学の教育を考える 第2回

・東北学院(大学)の英語教育を考える

戸田 征男

第10集 2010年3月

○特別報告

・本学の教育課程改革にむけての私案

斎藤 誠

○研究報告

・AO入試に関する試論(3)

片瀬 一男

—なぜ入試改革は「失敗」しつづけたのか？

：東北学院大学工学部の場合—

- ・日本の大学の「教養教育」の新たな動向  
—日本社会や大学教育の構造転換の中で—

岩谷 信

○報告

- ・2009年度「新入生意識調査」について

教育研究所

○シリーズ・東北学院大学の教育を考える 第1回

- ・「自己チュー」批判論の盲点  
—予言された「ナルキッソスの死」の意味—

岩谷 信

第9集 2009年3月

○研究報告

- ・AO入試に関する試論(2)

片瀬 一男

—AO入試はA型学生を選抜したのか、それともO型学生に選好されたのか？

：東北学院大学文科系学部の場合—

- ・教養教育科目としての「キリスト教学」の意味と課題
- ・性の多様性に対応する人権教育についての考察

佐藤 司郎

魚橋 慶子

○報告

- ・「大学生の勉強法」を教える初年時授業

—「言語文化基礎演習」の授業内容とその改善プロセス

佐伯 啓

- ・学士課程教育のめざす方向とその背景

吉村功太郎

○図書紹介

- ・神永正博著『学力低下は錯覚である』

菅山 真次

第8集 2008年3月

○報告

- ・初年次教育としての「大学生活入門」—法学部における実践報告—

斉藤 誠

- ・社会変容とこれからの教養教育

佐々木俊三

○研究報告

- ・AO入試に関する試論(1)

—教養学部におけるAO入試入学者の成績を事例に—

片瀬 一男

○特別報告

- ・各大学の「大学教育センター」系組織とその特色  
 —本学の「教育力の向上」を目指して・準備資料— 教育研究所・所員会議

## 第7集 2007年3月

### ○特別報告

「大学教育への取り組みに関する調査」(2006年11月実施)

- ・ユニバーサル化した大学における教員の苦悩

—東北学院大学の教員意識調査から— 片瀬 一男

- ・跋：調査報告書を読んで 副学長(学務担当) 大塚 浩司

### ○報告

- ・経済学科原級留の実態とその要因の調査報告 千葉 昭彦

### ○教育研究所所蔵図書紹介

- ・『恐るべきお子さま大学生—崩壊するアメリカの大学』 松本 洋之

## 第6集 2006年3月

### ○報告論文

- ・「工学基礎教育センター」の果たす役割と期待 石橋良信、星 善元、女川 淳

- ・文学部歴史学科におけるキャリア支援教育

—「就職の基礎」の〈解説〉を中心に— 楠 義彦

### ○研究報告

- ・ハビトゥスとしての読書の力

—東北学院大生の図書館利用と学業成績— 片瀬 一男

## 第5集 2005年3月

### ○報告論文

- ・成績分析からみた大学教育研究(4)

—アドミッションズ・オフィス方式による入学生の学業成績を中心に— 大江 篤志

- ・経済学科生の入試類型別成績

調査報告本学経済学科生の成績と入試類型との関連について 原田 善教

- ・退学者動向・調査報告(1) 教養学部の場合

意欲があって大学を去る者、意欲を失ってやめる者

二つの不幸な退学理由へのブル代数アプローチ 片瀬 一男

## ○特別報告

・教養学部「学生による授業評価」実施概要

教養学部授業評価委員会

## 第4集 2004年3月

### ○報告論文

・東北学院大学工学部における教育改善の試みと将来構想

石橋良信、星 善元、小野 孝、志子田有光、石川雅美

・カード利用による「事案のルール」獲得の可能性

陶久 利彦

・互惠を原則とした地域と大学との連携

—東北学院大学の社会教育実習・ボランティア活動の実践—

水谷 修

・NPOが大学と連携することの意義

—東北学院大学「ボランティア活動」への取り組み—

特定非営利活動法人グループゆう 中村祥子

・東北学院大学と連携した講座造り実習の取り組み

仙台市中央市民センター 今川義博

## 第3集 2003年3月

○成績分析からみた大学教育の研究(3)

大江 篤志

入学類型と全学共通科目学業成績との関係を中心に

1. 課題と方法 (1)目的 (2)方法 分析対象とする学生／入学類型／全学共通科目／英語系科目A1／英語系科目A2／4科目の学業成績の関係
2. 全学共通科目の学科別学業成績平均 (1)キリスト教学系科目X1 (2)キリスト教学系科目X2 (3)英語系科目A1 (4)英語系科目A2 (5)4科目の学業成績の関係
3. 文学部 3-1英文学科 キリスト教系科目X1, X2 3-2史学科 キリスト教系科目X1, X2／英語系科目A1, A2
3. 経済学部 4-1経済学科 キリスト教系科目X1, X2／英語系科目A1, A2 4-2商学科 キリスト教系科目X1, X2／英語系科目A1, A2
4. 法学部法律学科 キリスト教系科目X1, X2／英語系科目A1, A2
5. 工学部 6-1機械工学科 キリスト教系科目X1, X2／英語系科目A1, A2 6-2電気工学科 キリスト教系科目X1, X2／英語系科目A1, A2 6-3応用物理学科 キリスト教系科目X1, X2／英語系科目A1, A2 6-4土木工学科 キリスト教系科目X1, X2／英語系科目A1, A2



1. 教養学部教養学科 7-1人間科学専攻 キリスト教系科目X 1. X 2 /  
英語系科目A 1, A 2 7-2言語科学専攻 キリスト教系科目X 1. X 2 /  
英語系科目A 1, A 2 7-3情報科学専攻 キリスト教系科目X 1.X 2 /  
英語系科目A 1, A 2
2. 二部 8-1二部英文科 キリスト教系科目X 1. X 2  
8-2二部経済学科 キリスト教系科目X 1. X 2 /英語系科目A 1, A 2
3. 総括と検討 9-1主要入学類型の分布 男子/女子 9-2学科内部における学業成績  
の男女差 9-3入学類型別にみた学業成績の男女差 キリスト学系科目/英語系  
科目 9-4入学類型と学業成績 キリスト学系科目/英語系科目/キリスト教系科  
目と英語系科目の関係

おわりに

## 第2集 2002年3月

○成績分析からみた大学教育の研究(2)

大江篤志・水谷 修、他

入学類型と学業成績との関係

4. 課題と方法 (1)目的 (2)方法
5. 文学部 2-1英文学科 入学類型の分布/登録科目, 放棄科目,学業成績/  
学業成績/英文科小括 2-2史学科 入学類型の分布/登録科目, 放棄科目,  
学業成績/学業成績/史学科小括
6. 経済学部 3-1経済学科 入学類型の分布/登録科目, 放棄科目, 学業成績/学業  
成績/経済学科小括 3-2商学科 入学類型の分布/登録科目, 放棄科目, 学業成  
績/学業成績/商学科小括
7. 法学部法律学科 入学類型の分布/登録科目, 放棄科目, 学業成績/学業成績/  
法律学科小括
8. 教養学部教養学科 5-1人間科学専攻 入学類型の分布/登録科目, 放棄科目, 学  
業成績/学業成績/人間科学専攻小括 5-2言語科学専攻 入学類型の分布/登  
録科目, 放棄科目, 学業成績/学業成績/言語科学専攻小括 5-3情報科学専攻  
入学類型の分布/登録科目, 放棄科目, 学業成績/学業成績/情報科学専攻小括
9. 二部 6-1二部英文科 入学類型の分布/登録科目, 放棄科目,学業成績/学業成績  
/二部英文学科小括 6-2二部経済学科 入学類型の分布/登録科目, 放棄科目,  
学業成績/学業成績/二部経済学科小括

おわりに

## 第1集 2001年3月

○成績分析からみた大学教育の研究(1)

大江篤志・水谷 修

はじめに

1. 各学科の学生構成 (1)問題関心 (2)学部学科別学生数 (3)各学科の男女比
2. 対象卒業生の成績
3. 合否、法規科目数の学科男女別分布 文学部四学科 経済学部三学科  
法学部法律学科 教養学部 小括
4. 学生の移動の場 4-1-(1)入学類型の多様化 (2)留年と原級留置き、休学と退学  
(3)科目の性格 (4)教員カテゴリー (5)課外活動などとの関連  
4-2-開放系システムとしての大学教育

## 東北学院大学教育研究所規定

(制定平成10年4月1日)

平成10年4月1日制定第7号

改正 平成27年7月2日改正第58号

(設置)

**第1条** 東北学院大学（以下「本学」という。）に教育研究所（以下「本研究所」という。）を置く。

(目的)

**第2条** 本研究所は、本学教育及び高等教育に関する調査研究及び提言を行い、本学教育の改善に資することを目的とする。

(事業)

**第3条** 本研究所は、前条の目的達成のため次に掲げる事業を行う。

- (1) 本学教育（学生の学修行動及び学修成果を含む。）の現状に関する調査研究
- (2) 本学教育の基本問題に関する研究
- (3) 高等教育の基本問題に関する研究
- (4) 本学教育の改善に関する提言
- (5) 報告書等の刊行、講演会等の開催
- (6) 各号に掲げる事業実施に必要な資料の収集及び整理
- (7) 第1号から第5号に掲げる事業実施に関する情報提供
- (8) その他本研究所の目的遂行に必要な事業

(組織)

**第4条** 本研究所は、所長1名、所員若干名をもって組織する。

(所長)

**第5条** 所長は、学長が委嘱するものとする。

2 所長の任期は2年とし、再任を妨げない。

(所員)

**第6条** 所員は、本学の専任教員から所長が推薦し、学長が委嘱する。

2 所員の任期は2年とし、再任を妨げない。

(総会)

**第7条** 総会は、年2回所長が招集する。ただし所長が必要と認めるときは、臨時総会を招集することができる。

2 総会は、所員の過半数の出席がなければ開くことができない。

3 総会の議長は、所長をもって充てる。

4 総会は、本研究所の事業及びこれに関することを審議する。

5 総会の決議は、出席者の過半数をもって決する。

(事務職員)

**第8条** 本研究所に事務職員若干名を置く。

2 事務職員は、本研究所の事業遂行に必要な事務を処理する。

(経費)

**第9条** 本研究所の費用は基金、寄附金、事業収入及び本学からの補助金によって支弁する。

(改廃)

**第10条** この規程の改廃は、総会が発議し、教授会の議を経て学長が行い、理事会の承認を得るものとする。

附 則

1 この規程は、平成10（1998）年4月1日から施行する。

2 昭和42年4月1日制定の東北学院大学教育研究所規程及び昭和47年10月1日制定の東北学院大学一般教育研究所規程は廃止する。

附 則（平成27年7月1日改正第58号）

この規程は、平成27（2015）年7月1日から施行し、平成27（2015）年4月1日から適用する